

ユニセフで 学ぼう!

学校における
ユニセフ活用の
可能性

~「総合的な学習の時間」とユニセフ 研究会 報告~

2002年度(高校は2003年度)から本格的に導入される「総合的な学習の時間」。これにともない、ユニセフを活用して「総合的な学習の時間」でどのような学習テーマを設定し、活動することができるのか、9月から12月まで5回にわたって、小・中・高等学校の先生方と研究会を開催しました。研究会の成果は今年4月に発行される「ユニセフと総合的な学習の時間 先生のための手引き(仮題)」にまとめられ、全国の学校に送付される予定です。

座談会

ユニセフは、学校でどのようにとらえられ、また、どのような活用の可能性があるのでしょうか？
研究会の成果も踏まえ、参加者の先生方と座談会を行いました。



私自身、ユニセフに直接かかわったのは小学校の募金活動からです。中2でユニセフカードを購入しました。カードやグッズというものが手元に残ることで、ユニセフの活動についても知る機会を得た、という記憶が残っています。



ユニセフというと文化祭。展示でユニセフなどの説明はありますが、それで

終わってしまう。日常的な活動につながらないという問題はありますね。

ユニセフの「開発のための教育」については、ワークショップにずっと参加しています。授業でアクティビティを使っていますが、参加型学習を取り入れるということについてもユニセフは役立ちます。ただ、アクティビティを使ってみてどうだったか、というフィードバックの場がないのが残念。



世界への入り口としてユニセフはとてもいい。同じ世代の子どもを扱っていることが大きい。生徒は「はじめて知ること」が多いので、どうしても「ひとつごと」ではあるけれど、「同じ世代」という接点から関心を持てる。テレビといってもバラエティ番組しか見ない、欧米の情報しか入ってこない中で、開発途上国の状況を具体的に知ることができるという点でユニセフは重要です。募金がどのように役立つかを知ることも、先進工業国にいる自分は何ができるのか、国際協力のイメージを与えることができる。具体的な想像をかきたてる、ユニセフはそういう点で教育力があると思います。



児童や生徒の学ぶことに
教員自身の関心が影響を
与えることもありませんか？



「総合的な学習の時間」がはじまったとたん、教師が動かざるを得ない状況が現われました。私の学校では、各自が追求したいテーマを決めて取り組む授業を行っ

ています。アリの研究をはじめた子の例ですが、えさに砂糖をあげたら腹が透明になってきた。それでえさを変えてみる。長生きさせるためには女王がいる必要があるということがわかり、さがすために土を掘り返す…。すごいことになっていきます。個々に課題が違うので、児童の知りたいことを調べさせるのは大変です。教師同士が知恵を出し合ったり、学校の枠を超えていく勇氣も必要だと感じますね。

ユニセフについての学びのきっかけはポスターでした。「ポスタートーク」(*)を行い、ポスターを通じて世界中の子どもと「話」ができました。その後代表委員会が、募金の呼びかけのときに、ユニセフマークを全校児童に指文字で書いてもらう、というコマーシャルをやりました。「指を出してください。子どもをかいてください。お母さんをかいてください。平和のマーク、オリーブの葉をかいてください。それがユニセフです」。そのときユニセフがみんなに伝わるイメージとして現われました。ポスタートークから子どもたちは、生きた意味のあるメッセージをつくったんです。

とにかく、児童が追求し行動を起こすためには教師の行動、そして思いを持つことが大切でしょうね。

(*)ポスタートーク：いろいろなポスターを掲示し、各ポスターの下に各自が感じたことや意見を書き込み、それを見ていく活動。ポスターを媒介したコミュニケーション活動。



最後にひとことお願いします



生徒会活動で何を続けてほしい?と生徒に聞いたところ、ユニセフは続けてほしい、と。教師側の問題もさることながら、子どもからの動きができれば、教員に気づかせることにもつながる。身近な問題として、いじめや命の問題について日本の子どもの危機的な状況にある、という認識があります。子どもの権利条約や子ども自身の自主的な活動をどのように進めていくか、という点で、ユニセフは活用の幅が広いでしょう。



活用以前の問題として、もっとユニセフの資料の宣伝を。私は社会科の教員ですが、ユニセフの資料を見ていると使える資料が山のようにある。けれどそれを知らなかった。ユニセフの資料が有用である、ということは疑いようもない事実で、使い道は限りません。もっと宣伝を、それが現実ですね。

Q ユニセフという学校では どのようなイメージでしょう?



募金というイメージが大きいです。ユニセフの資料は、毎年学校に送られているはずですが、教員個人の手元にこない。私は、協会でのユニセフセミナーに来て、ユニセフはたくさんの情報を持っていることがわかりました。



「総合的な学習の時間」。今、学校現場では「環境」はイメージできるけれど、「国際理解」「福祉・健康」というのはやり方が見えていないんです。だからユニセフはきっかけになる。



ユニセフの資料に戦後のユニセフによる脱脂粉乳支援のポスターがあったので、給食試食会のときにランチルームにはっておいたら、保護者や子どもたちに当時のことを説明する機会を持ってました。実はユニセフの資料を発展的に使える場合は本当にいろいろあります。ただ、チャンスはあるけど、知ろうとしなければ流れていってしまう。宣伝活動は学校の中でもやらないと。



Q 募金以外のユニセフの
受け取られ方、というのは
どのようなものでしょう?



ものすごく大きな知名度、だけど残念なことにはそれだけ。詳しいことは知られていない。資料が末端まで届かないという問題を解決するには、ユニセフを「運動」として位置付けていかないと。このように教員が会って話すことは素晴らしいことです。

学校でのボランティアも福祉関係など誰もが安心してかかわれるものが多く、世界とつながるボランティアは欠落している。ユニセフは名前が定着しているし、世界とつながるボランティアとしてありうる存在でしょう。